

まとめ

甲斐ム ありがとうございます。私はこの話し合いの最初に5つの問題に整理して提案しました。第一は言語教育における国語科と他教科の役割の分担の問題。ここのところは、いろいろと新しい問題が取り上げられて、甲斐雄一郎さんが言われたように、国語科の役割について真剣に考えなければいけない、ということがわかってきました。第二の、国語教科書の問題は、その後は続きませんでした。大きな問題として我々の頭の中に定着したと言えるように思います。第三の、見え隠れする規範という問題、これはもっと力を入れて解明していかなければいけない。ですから、言い方は悪いのですが、帰国の子どもや外国人の子どもなどを教えることによって、学校教育にある見えない規範というものを明らかにして、その縛りといったものを我々が打破していく努力をしなければいけない、ということがわかってきたと思います。第五の、連携という問題については、石井恵理子さんに非常によくまとめていただいたわけですが、この連携についてはこれからもより一層我々が力を合わせて取り組んでいきたい。その連携に関連して、国語教育と日本語教育という名称の問題もあるわけですが、内容の方でかなり歩み寄りできたということもわかってきましたので、そういうことをこれからも一層研究で進めていきたい。

今日は私は協力者の方々が4年目ということで研究が力強く進んでいるということを非常にありがたく思いました。これで、第3セッションの話し合いを終わりにして、柳澤好昭さんによる今日の第3専門部会のあいさつをお願いしたいと思います。

柳澤 私事なのですが、自分の息子がもうじき新しい教育課程で習うのかと思うと、どんなふうになるのか、真剣に考えます。先ほど細井先生という名前がでましたけれども、先生と話したときに、「かず」と「すう」と「すうじ」と「すうち」の違いというのを皆さん、今御説明できるでしょうか、というのがありました。実はこれは全部きちんと分けられているわけです。このような概念形成は非常に難しいことですが、それでもコミュニケーション生活はしてこられるわけですがね。子どもたちがどういう知識を蓄積し、どういう能力を身につけることによって彼らにとってプラスになっていくのか、彼らの身になることはなかなか難しいですけれども、一番大きな要素としては、彼らの発達における態度の形成ということが我々に問われていると思うのです。そのためには学校の先生、授業内容というのは大きな要目です。例えば、学校の先生がリラックスしなければ、子どもたちもリラックスしません。先生がコミュニケーション能力を認知、習得していなければ、子どもも教室内では知覚できません。というようなことを考えていくと、コミュニケーション能力って何だろうな、育成できるものだろうか、と真剣に考えていかなければいけないのではないのでしょうか。分析能力というか、問題解決能力と簡単に言いますが、これはどのように見られるものであろうか、また、どうやって評価ができるのであろうか。大きな問題だと思います。国語教育でも日本語教育でも教科教育でも全部が問われているのではないかと、思いました。

最後になりますけれども、たぶん教育課程審議会の提言がある時期かどうか、その辺が微妙なところなのですが、間違いなくこの第3専門部会も公開研究会の形で来年度行われ

と思います。内容に関しましては、教育課程審議会の提言の時期と、我々の第3専門部会の時期との兼ね合いもありますので、もう少ししめんと詰めることができないのですが、また、来年度にも皆さんにお世話になると思います。よろしくお願ひしたいと思ひます。

なお、本日のシンポジウムの内容は文字化をしまして報告書にまとめまして、文部省をはじめ学校の先生方や日本語教師の方々などいろいろなところに見ていただければ、と思ひております。その方が、先ほど上野さん、西原さんなどの意見にありました学習者、あるいは外国のいろいろな方たちと接点を持つ機会を得ると思ひます。

それでは、これで第3専門部会を終わらせていただきたいと思ひます。今日は本当にいろいろとありがとうございました。